

## ノイエスだより

ノイエス朝日(朝日印刷工業株式会社)  
 群馬県前橋市元総社町七三-1-5  
 TEL 027-2555-3434  
 FAX 027-2555-3435  
<http://www.neues-asahi.jp>

四月一日に新元号「令和」が発表されました。

五月一日から施行される「令和」の出版については国書である万葉集「巻五 梅花の歌三十二首并せて序」。天平二年(七三〇年)の大宰帥の大伴旅人邸の梅園で催された「梅花の宴」の宴席で詠まれた三十二首の序文だそうです。

戦後の昭和、平成を生きてきた・・・さらに「令和」を迎えるにあたって、過去への懐かしい想いが自分の中にしっかりと住みついてしまったようです。戦後の平和な時代に生を受けて、子供時代を過ごし何不自由なく学生生活をおくり、多くの恵まれた人間関係のなかで、仕事も私的な交友関係も充分満足できるような環境で時間が流れてきました。

社会の激動の流れのなかで自分の時間を多少コントロールしながら、沈むこともなく波に身を任せていた時もあつたようですが、権を片手に力任せに舟を漕いだこともあつたようにも思えます。

大正、昭和の戦前を生きてきた方には、それ以上に想像も出来ないほどの大きなものを抱えもつて「令和」を迎えることでしょうか。

梅花の優しい香りに誘われて、個性的な蠟梅の香りに誘われて、「からつ風」がいつしか「春一番」となり、快い春風が吹き始める頃、桜の花びらが雪のように舞いながら足元を絨毯のように埋め尽くし、次第に美しい新緑が風に揺れ、囁くような音をたてて季節の移り変わりを感じさせてくれます。快い風に和らぐような良い日々を「令和」という元号のもとで過ごせるように願うばかりです。

四月は新年度の始まり、さらに新元号の始まりを五月に控えて、入園式、入学式、新学期、入社式とお祝い事も多く、出費も重なり、多忙な毎日を通り、さらに体調を崩したり、少し遅いインフルエンザにかかったりと精神的にも肉体的にもダメージを受けやすい季節です。

少し気を引きしめて日常生活を自然体で切り抜けていきましょう。  
 四月末から五月初旬(四月二十七日～五月六日)までノイエス朝日は休暇に入ります。(朝日印刷工業株式会社お休みです。)

五月十一日(土)から八月初旬まで企画展、貸画廊が続きます。  
 久しぶりの個展あり、グループ展あり。また、ノイエス朝日で初めて個展をする方と、新たな出会いもあります。

また、恒例になりました石川薫記念地域文化賞受賞者特別講座が下記の日に開催されます。事前予約も受けつけておりますので、お誘い合わせの上、お出かけ下さい。お待ちしております。

(武藤)

## ノイエス朝日〈展覧会〉のご案内

## 住谷夢幻展 ―墨のアフォーリズム― 〈企画〉

現在開催中(十七日(水)まで)

午前十時～午後五時三十分(最終日は午後五時)

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

## 第22回 樺澤健治作陶展

会期 四月十九日(金)～二十五日(木)

午前十時三十分～午後七時

(最終日は、午後五時終了)

\*通常時間とは異なります。ご注意ください。

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

不可治窯 渋川市赤城町持柏木一〇四〇―二

電話 0279-565617(樺澤)

## ノイエス休廊

四月二十六日(金)～五月十日(金)

## 平出 浮足 豊 彫刻展 〈企画〉

会期 五月十一日(土)～十九日(日)

午前十時～午後五時

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

## 木村隆哉油彩展

会期 五月二十二日(水)～二十八日(火)

午前十時～午後五時

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

石川薫記念地域文化賞受賞者特別講座  
第三回

## 「古墳時代研究から探る(群馬のルーツ)」

講師 深澤敦仁氏 〈第16回奨励賞受賞〉

(群馬県立歴史博物館学芸係長)

日時 六月二十日(日)午後一時～

会場 ノイエス朝日 スペース1

資料代 五〇〇円

## お申し込み

ノイエス朝日 電話 027-2555-3434

お申し込みは、[展覧会会期中の午前十時～午後五時まで](#)

お電話にてお申し込み下さい。

小松健一写真展「民族曼陀羅」中国大陸には、多くの方々が来廊されました。会期中に四回のギャラリートークを開催し「多様性の中に共生する大陸」八三二七〇キロの旅を作品鑑賞しながら、参加者とともに旅をしました。

そんな一日、小松氏をネパールの方がやっているカレー屋さん案内。普段は昼食時に一人で食事をしては、店の人とチャイ(香辛料が入った紅茶)の作り方や雑談をしてくるので・・・三〇回以上も旅をしている小松氏を案内するのは・・・と多少は考えましたが、行ってみればそれなりに楽しまれていました。

昔(二十～三十年前)は、画家が集まる酒場があつて週末に行けば知人数人に会うのがあたりまえでしたが、車社会になつて作家達も外で飲む機会がなくなつてきたようです。当時、酒席での画家の話は実に楽しいものでした。

時々、喧嘩になることもありましたが長年の付き合いで次々会う時には、すっかり忘れていたのか、相手を熟知しているのか、無視しているのか、まったくわからない事もありましたが、とにかく思い出深い日々でした。

こんな酒宴の空間、時は、もうどこにもないのでしょいか。